
異世界の異端者

アル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界の異端者

【Nコード】

N5591Y

【作者名】

アル

【あらすじ】

異世界もの。

超能力者の主人公が、異世界に逝ってしまったぜー。って感じのやつです。ゲームのキャラがチートを使った様な最強な設定はないです。ある意味ですけどw

思いついた設定を書いてみました。そして、ストーリーも決まってません。初なんでグダグダになると思います。

1. ある日、森の中

「やっべー、遅刻する！」

一人暮らしの部屋にそんな声と目覚まし音が響く。

目覚ましの音を止め、ベットから這い上がりすぐさま学校の準備を始める。

夜中ついTVを何気なく見ていると気になる番組を見かけて、気になってしまい最後まで番組を見てしまい夜更かしてしまった。

そんなわけで起きるのがギリギリになってしまったのだ。

まあ、準備なんてものの10分も掛からずにおわるのだが、授業開始まで残り15分をきっているためのんびりできる暇はないため急がなければならない。

10分で身支度を済ませ、あと残り5分だ。

（これで授業に遅れなくて済むぜ。）

そう思いながら、いつも通り ムーブ>テレポルト< と軽く想う。これでいつも通り教室の景色に跳ぶとそう思考していたが・・・

（アレ・・・？）

いつもの感覚と違うことに違和感を感じる。

普段なら一瞬で教室の景色が目映るのだが、なぜが無重力のような感じで色彩も認識できないような世界が広がる。

そんな世界が3秒ほど続いたと思ったら、視界が一気に明るくなる。

気が付くと周りは木に囲まれていた。

自分の目で見ても木が見えるのみ。

空間認識範囲を広げて確認するが、木と草と虫のよくわからない小動物の認識しか確認できない。

そう、俺は森の中にいた・・・。

「おいおい、マジかよ…w」

気がつけばそんな独り言が口から出ていた。

内心焦りつつ自分がおかしくなっていないか確認する。

俺は、箕^み辻^{つじ} 行^い夜^や 19歳。

どこにでもいる普通の大学生だと思う。

うん、いたって俺は普通だ。

おかしくなっているわけではない。と、自分に言い聞かせながら冷静になる。

（俺は学校に行こうと思って跳んだのになぜ森の中にいるんだ？

授業があるんだぜ？なにやってるんだよ俺！ のんびり考える暇があるんならさっさと教室跳ばないと遅刻だぜ。）

そう思い、再び跳ぼうとする。

（え？跳べない…）

教室に跳ぼうとするが目の前の景色が変わることはない。

（あれ、なんで跳べないんだ？ムーブ>レポート<できない？）

そう思い、10m離れた所を見てムーブ>レポート<を実行すると、一瞬で景色は先ほどいた場所の10m離れた（ムーブ>レポート<を指定した）場所に跳ぶ。

（べつに、おかしくはなっていないか。）

内心、自分の力は大丈夫とだと安堵しながら思う。

（他の能力は大丈夫かな？）

少し心配になった俺は

試しに、ここから7mぐらい離れた場所の岩（認識では600kgぐらい）1mぐらい軽く上にあげてみる。

普通に大丈夫だ。

さつきから、空間認識は普通に使えてるのでこっちは確かめなくていいか。確認する。

（でも、それならなぜ跳べないんだ？ あ、教室に空間規制が掛か
ってたのかな？ じゃあ、慣れた所に跳ぶかー）
そう思い、自分の見慣れた場所を指定して跳ぼうとするが俺はこの
場所からその場所へ跳ぶ事はできなかった。

そう、俺は現在進行形で迷子のピンチなのだ。

2・熊さんに出会った

どのくらい経ったのだろうか。

俺はすることもなくやることもなくただ歩いていた。

「はぁ…、どこだよーここは…」

口からため息がこぼれる。

正直、ため息しか出ないんだけどね。

体を浮かせて上に飛んだのだが周り一面、木、木、木

うん、もう森に囲まれてるんだけどね。

いつこうに変わらない景色にうんざりしながら岩に腰を下ろす。

「せめて、木じゃなくて可愛い女の子に囲まれてるんなら最高で幸せなんだけどなあ」

そんな、冗談めいた事がつい口から独り言として漏れる。
もう、ここに来てかれこれ4時間は経っただろうか…。

それでも4時間無駄に歩いていたらわけではない。
歩きながら周りの状況を観察し分析してわかったことがある。

ここは俺の知っている星ではないという事。

周りは見たことない植物や虫をチラホラ見かけるというのが理由だ。
世界は広いので俺が知らないという可能性もあるのだが
極め付けなのが…

月？みたいなのが1つと、その月の3分の1ぐらいの大きさの月が

2つある。3兄弟みたいな月だ。

これを見ると地球ではない事は明らかなのだ。

しかし、ここは地球であってほしいと願ってしまう。

情けない話、こんな状況に陥ってしまうと心の中で希望というものが欲しくなってしまう。

自分が壊れないように…。

そんな事を思い考えていると、「ぐうぐう」と音が聞こえてきた。

俺の腹の虫が鳴いたようだ。

こんな状況でも体は正常に働き、腹が虫がなかった事に安心し気が抜ける。

「腹減ったなあー」

独りをいいことに叫ぶ。

こんな、状況に陥れば叫びたくなるんだもん。独りだし。

まあ、余計に疲れてお腹が減るんだけどね。

そういえば、さっき上に飛んだとき川があつたよな。跳ぶかー。

そう思い、先ほど見た川を思い浮かべ目を閉じて（ムーブ>テレポ
ートく）を実行する。

川の流れる音が聞こえる。

目を開けると先ほど小さく空から見えてた川が目の前に広がっている。

それにしても、きれいな水だ。そんな事を思う。

俺の住んでた場所の近くに川はあった。しかし、人工の川で水も緑

のような色をしており遊んだり泳いだりしたりできる川ではなかった。

しかし、目の前に広がる川は済んでいて本当に綺麗だった。川底もはつきり見えて無色透明だ。

川に近づき、水をすくって口に入れ、喉を潤す。

「うまい。」

そんな言葉が、出てしまった。だけど正直、水の味なんてわかんないんだけどねっ。

リラックスしつつ、川を見渡すと魚が泳いでいた。

（とりあえず腹ごしらえするか）

そう思い、泳いでる魚に狙いをつける。

すると、魚が水の中から姿を現し空中に浮く。そのまま、自分に近づければ一丁あがりだ。

そのまま、力の使用を解除すると魚が地面に落下し、俺の目の前で魚がピチピチと元気よく跳ねる。

（とりあえず、食料確保完了っつと）

そう思いつつ周りの木の葉や木の枝を集める。

そして、サイキックで木の枝同士を高速で擦り合わせ摩擦の熱によって枝に火をつけ焚き火を作る。

ある程度の火を確保し、生きたままの魚に枝を突き刺す。

（ごめん。悪いな…これも生きるためだ。）

魚に謝り感謝しながら、先ほど用意した焚き火で魚を焼く。

すると、魚の焼けるいい匂いが俺の鼻をくすぐり、食欲をより一層引き立てる。

魚がちゃんと焼けてることを確認して、焼き魚にかぶり付く。

「んーーーーー」

おいしい。美味しい。

ほんとに美味いと口から言葉が出ないと言うが本当のようだ。

スーパーに売ってる物とは比べ物にならない美味さだった。

流石、自然で採れた物は違うな…。そんな事を思いながら食べてると、魚の身は消え骨だけが残っていた。

「ふう、食った食った」

満腹に満足しつつ少し横になる。

（これから、どうするかなー）

そんな事を、考えていると満腹のせい、段々眠くなってくる。

（少し寝るか。）

そう思い目を閉じようとする。

ガサガサガサ

そんな少し大きな音が俺の耳に付く。

（もしかして、人が？）

そんな、希望を思い浮かべながら音のした方向へ体を起こしつつ体を向ける。

すると木と木の間から、7mぐらい毛むくじやらの物体が出てくる。よく見ても見なくても、熊だった。

正確に言えば熊の様な生き物なんだけどね。熊に似てる感じだ。

そんな、感想を思っていると、そいつは獲物を見つけたような目をして俺を見ていた。

俺が、魚を見つけた時のような目をね…

「え…？ マジで？」

（俺、美味しくないよ？ いっちゃうの？ ねえ、ねえ、）

気が付けば、そいつは突進をして俺に飛び掛ろうとしていた。

俺、本日2回目のピンチ。 なにこの人生…

3・ 出会いの果ては？

「—————」

ドスッ

ソイツの振り下ろした手が何かにめり込む様な音が俺の耳に届く。

（死んだ、死んだしんだしんだ）

いやー、ほんとにそう思ったね。

でも、人間っていざピンチになると何とかなるもんだね。 うん。

ついさつき、立ってた所ではソイツの振り下ろした爪が少し地面にめり込んでいた。

あの場所に立ってたら今頃、挽肉のミンチだったね。

反射的に（ムーブ>テレポート<）を使用した俺はソイツと、10mの間を空けて立っていた。

ソイツは目標（俺）が振り上げた手いない事に戸惑うような素振りを見せる。

（怖い、恐ろし、ヤバイヨー）

俺の頭の中でレトロゲームのコマンドが頭に浮かぶ。

—	戦闘	—
—		逃げる
—	撤退	—
	逃亡	

よし、逃げよう。

俺は、迷わず撤退を選ぶ。

最初から、戦う気なんてないんだからねっ！

逃げようと思ったその時、ソイツと目が合う。

背筋にゾクリと冷たいものが走る。

そして嫌な予感。

そりゃー、もちろんお約束ですよー。デスヨネー。

はい、俺のほうに向かってきました。

俺に到達するまで残り4m

咄嗟に、俺はソイツに力をぶつける。

ボコ と鈍い音を上げながら目の前で巨大な巨体が放物線を描くように宙を舞い砂煙を上げながら地面に転がり、木をなぎ倒し止まる。

「た、倒したのか…」

安堵が心に広がる。助かったのだ、と。

だが、その安心もつかの間。

倒した、と思った巨体がのそりとゆっくりと体を起こす。

その体から血が流れ、ポタポタと地を赤く染める。

ソイツは顔をこちらに向けギラギラした獲物を見る様な目で俺を見ていた。

そして、こちらに向かってくる。

負傷したため、先ほど突進してきたようなスピードはない。

迫ってる圧迫感はずかに感じる。

だが、心の中には強い安心と高揚感が心に広がり恐怖や不安は散る。俺には相手を倒す力が有るのだと。

そして、力をぶつける。

ドゴッと音を立て10mぐらい吹っ飛び転がる。だが、ソイツは起き上がる。

俺を狙い体を動かし、迫る。

そこからは一方的な暴力だった。

どんだけぶっ飛ばしても、血がいくら出ようと骨が折れようと骨が肉から突き出てもソイツは俺に迫る。

ただ、気が狂った本能のままに：

（なんでだ。なんでだ。なんでなんだ。）

そんな、疑問と畏怖が俺の心に駆け走る。

なぜ、そこまでして俺を狙うのかと。

普通は、最初に吹っ飛ばされて逃げるのかと思った。本能的にだが、ソイツは違った。

いくら傷を負ってもフラフラと歩きながら俺に向かってきた。

そして、俺は躊躇いながらも力を振るう。ソイツに向かって。もう、これ以上戦う必要は無意味だと知りながら。

グチャッと、潰れる様な音を上げながらぶっ飛びソイツは転がり止る。命の炎と共に。

赤・紅・あか・アカ

目の前には血の海と鉄臭い景色が広がっていた。

初めて生き物を殺してしまった。そんな思いと共に胃に入ってた物を吐露してしまう。

気がつけば食べたものを全て出してしまった。

勝ったはずなのに、虚しさと悲しさが心を満たす。

「オウエ…、何なんだよ、何なんだよこの世界はーーーーっ！」

3 . 出会いの果ては？（後書き）

誤字脱字などあればご指摘ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5591y/>

異世界の異端者

2011年11月26日21時45分発行